

サバティカルの期間中、祈りをもって支えて下さった皆さんに心から感謝いたします。サバティカルに入って間もなく、一か月ほど単身で日本に行きましたが、それがずいぶんと前のように思えるので、それだけ長い間、クロスウェイの働きから離れていたことを思われます。私もそうですが、その間、皆さんもいろんなことを経験されたことでしょうか。今は、ものすごい勢いで世の中が変化していますから、私も情報を集めるのに必死です。ただ、それを難しくさせるのが、その中にうそ偽りが多く含まれているということです。どれが真実で、どれが嘘なのか、それを見分けるには、リサーチの仕方を含め、主からの判断力が欠かせません。

そういったことを思い巡らす中で、サバティカルの期間も終了し、クロスウェイの働きに戻ってきたわけですが、この朝、私が皆さんと分かち合いたいことばは、サバティカル前に開いたところと同じ箇所です。覚えておられますか？箇所が同じなので、きっと内容も同じだろうと、どうぞ心を閉ざさないでください。聖書は神のことばであって、どの箇所もそうですが、それは皆さん、あなたの永遠に関わることです。どうぞ自分の心の状態、また生き方を吟味しながら、聴いて下さることを願います。

では早速、皆さんにお尋ねしますが、あなたは今日、主の現れを慕っておられますか？主イエスがこの世に戻って来られることを、あなたは心待ちにしておられるのでしょうか？黙示録で見た「主よ、来て下さい。マラナタ」が、主イエスへのあなたの心を表していますか？主の現れを慕うこと、それはなぜそこまで重要なのでしょうか？それは、正しい審判者である主が、そのような人に義の栄冠を与えて下さるから、つまり、救いを完成させて下さるからです。そのようにいうと、「私はもう救われているので大丈夫です」という人がおられるかもしれません。もしあなたが主イエスを救い主と信じておられるなら、その通りです。

でも、ここで注意してほしいこと、それは義の栄冠を授けて下さるキリストが、正しい審判者(Righteous judge)である、ということです。この方は、あなたの心、そこにある思いや計画、またその生き方のすべてをご存じで、全く不正のないさばきを行われます。その上で、あなたは「私は大丈夫、義(正しい)なる者だから」といえますか？むしろ、「この罪は赦されているだろうか。あのことはどうだろう？」と自分の罪人としての現実に不安を感じるのではないのでしょうか？でも、そこに正しい審判者である主はあわれみをかけて下さいます。主イエスは、最初来られた時、私たちの罪をその身に負うことで、神のさばきを代わりに受けて下さったのです。それは、その十字架の死、贖いの死をもって、ご自分を罪と滅びからの救い主と信じる人の罪をすべて赦して下さるためです。そのためにこそ、主はわざわざ人となってこの世に来て下さいました。

ですから、正しい審判者である主は、その救いの道を拒み、自分を正しいとする人は退け、でも、自分が罪人であることを認めて、主の前にへりくだる人を義と認めて下さるのです。義の冠、救いの冠を授けて下さいます。「私は自分を救えません。罪人だからです」と認めることが、私たち罪人にできる最も正しいことであり、それを主も求めておられるからです。そして、そのために主は自らのいのちを罪の代価としてささげ下さいました。ここに審判者の与える冷たいイメージとは違って、まことの愛が示されているのです。ヨハ 4:10 「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです」。

いかがですか？今日あなたは、あなたが「救い主」と告白する主イエス・キリストの愛を受け取っておられますか？どれだけ主があなたを愛して下さっているかを知っておられるのでしょうか？その愛を日々主との個人的な交わりの中で受けることで、あなたもまた心から主を愛し、この方に導かれて歩んでおられますか？そのことのゆえに、いつ主が迎えに来られてもいいように、日々主を待ち望んでおられるのでしょうか？主は、あなたの心をご覧になり、そこにご自分を慕う愛があるかどうかを見て、義の栄冠を授けて下さいます。なぜなら、主を信じるとは、ただ情報を知るのとは違って、主との信頼と愛の関係に入れられることだからです。

ですから、もしこのメッセージを聴いておられる方で、まだ主イエスを信じていないという方は、今日(今)主を罪と滅びからの救い主、あなたに永遠のいのちを与えて神の子どもとして下さる神の救い主として信じ受け入れて下さい。ロマ 10:9-10 「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを

死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。10人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」。

主イエスに愛され、主を愛する人は、主の現れを慕います。それは極めて当然のことです。でも、ただ何もせずにその日を待っているかという、そうではありません。その日に向けて備えるのです。皆さん、その日に備えた歩みはどんな歩みですか？パウロは言います。7節「私は勇敢に戦い、走るべき道のを走り終え、信仰を守り通しました」。今日あなたは勇敢に戦っておられますか？走るべき道のを走っているでしょうか？主イエスへの信仰を最後まで守り通すこと、それはあなたの人生における最優先事となっていますか？

どうか、あの偉大な伝道者パウロが、自分の死を目前に、自分が何を成し遂げたとか、どれだけの人を救いに導いたとか、自分の功績について語っていないことに注目して下さい。むしろ、彼は、この世の霊の戦いを勇敢に戦ったこと、神様から与えられた走るべき道のを走ったこと、そのようにして最後まで主イエスを見続け、主に信頼したことを大事なこととして語るのです。なぜかわかりますか？それは、どれも主との生きた関係を離れては成り立たないものだからです。もっと言うと、主イエスだけが本当の意味で、勇敢に戦い、走るべき道のを走り終え、父なる神への信仰を守り通されたお方であり、この方はご自分が愛する者(私たち)にそのような歩みをさせて下さるのです。ですから、主イエスとの愛と信頼の関係に入れられた人は、主の現れを慕い、その日がいつ来てもよいように、主にあって、そのような歩みへと向かいます。

では、私たちをして「勇敢に戦う」とは、どういう意味ですか？エペ6:10-12「終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。11 悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。12 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです」。私たちの戦い、それは悪魔の策略に対するものです。それは血肉、つまり、人間に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

では、その悪魔に対して私たちはどう勇敢に戦えばよいのか？悪魔はどんな策略をもって、私たちを攻撃するのでしょうか？ヨハ8:44「…悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです」。悪魔の策略、それは偽りをもって私たちを神様から、またお互いから引き離すものです。そして、その偽りに従う者をみな殺します。つまり、永遠の滅びへと道連れにするのです。ペテロは、悪魔についてこう語っています。Iペテ5:8「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています」。

私たちは敵であるこの悪魔に対してどう勇敢に戦えばよいのですか？エペ6:13-18「ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。14 では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、15 足には平和の福音の備えをはきなさい。16 これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。17 救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。18 すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい」。

真理、正義、平和の福音、信仰、救い、御霊の剣＝神のことばは、どこにありますか？それはみな主イエスのうちに見られるものです。そういう意味で、キリストを着るといっても過言ではないでしょう。私たちをして悪魔の策略に対して勇敢に戦えるのは、主の恵みによってキリストを着させていただくことによってです。そして、そこには祈りが欠かせません。祈らない人で、真理、正義、平和の福音、信仰、救い、神のことばを備えている人はいないのです。祈りは、主についてただ知っている、ではなく、主との生きた交わりを生じさせるものですから、祈りを通して私たちは主を知る者となります。あなたは神の武具をとり、祈ることで悪魔の策略に対して勇敢に戦っておられますか？

パウロはこうも言います。「私は走るべき道のりを走り終え」と。主の現れを慕う人は、何もせず、ただその日を待つ人ではなく、主の現れが来るまで、主から与えられた道のりを走ります。コロナ禍が続く中で、疲れ、弱り果てている人がおられると思います。でも、イザ 40:27-31 にこうあります。「ヤコブよ。なぜ言うのか。イスラエルよ。なぜ言い張るのか。『私の道は【主】に隠れ、私の正しい訴えは、私の神に見過ごしにされている』と。28 あなたは知らないのか。聞いていないのか。【主】は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。29 疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。30 若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。31 しかし、【主】を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない」。

これは直接的には、捕囚の中にある神の民に対して預言者イザヤが語ったものですが、私たちが信頼する神様はこのようなお方です。ご自分を待ち望む者に新しい力を与えて下さるのです。ヘブル書の著者は、主から与えられた走るべき道のりをどう走るべきかを私たちに教えてくれています。ヘブ 12:1 「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか」。

与えられた道のりを走るにあたり、まず重要なことはいっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てるということです。皆さんの中に、神の国とその義とをまず求めずに、それ以外のことに心を奪われている人はいませんか？神様よりも自分を、この世を愛することで、余計な重荷を担っている人はいませんか？罪はどうですか？自己中心さや誇り高ぶりから、自分を神とすることで、神のではなく、自分の道を走っている人はいませんか？義の栄光を受けたいなら、それらを捨てる必要があるのです。そして、忍耐をもって走り続ける。ヘブル 10:36 「神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である」。

忍耐が問われる時、私たちは目標(ゴール)から目を離し、途中で諦めたくになります。でも、先ほどのヘブ 12:2-3 はこう続けます。「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。3 あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです」。私たちをして、自分の前に置かれた走るべき道のりを走るのに最も大事なこと、それは救い主である主イエスから目を離さないでいる、ということです。主こそ、信仰の創始者であり、完成者であられるからです。

皆さん、主は私たちに信仰を問うておられます。でも、自分の信仰を誇れる人が果たしているのでしょうか？主イエス以外に、信仰を誇れる人はどこにもいません。なぜなら、主だけが、父なる神様の御心、つまり、義の歩みとしての完全な歩みを全うされたお方だからです。そして、その歩みとは、死に至るまで、実に十字架の死に至るまで、父なる神様に従うというものでした。しかも、その理由は、正しい人を救うためでなく、不正な者、罪人を救うためです。でも、主はご自分の死によって私たち罪人が救われることを喜びとされました。それゆえに、罪人たちの反抗、つまり、十字架の苦しみを耐え忍んで下さったのです。皆さん、それが愛でなくてなんですか？主は、そこまであなたを愛して下さいます。

ですから、十字架の死後、三日目によみがえられた主は、神の御座の右に着座され、今日も私たちのためにとりなして下さいます。つまり、ご自分を信じるすべての者が、その現れを慕い、この地上での戦いを勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、最後までご自分に対する信仰(信頼)を守り通すために、助け主である御霊を与え、みことばを語ることで力強めて下さっているのです。私たちの信仰は実に小さいものです。でも、その信仰の対象である主イエスが大きなお方、信仰の創始者であり、完成者であられるゆえに、この方を慕う者に主は義の栄冠、救いを授けて下さいます。

主イエスは、悪魔を「この世を支配する者」(ヨハ 14:30)と呼びましたが、父なる神様は、この悪魔が人々を惑わすことをよしとされるのです。ですから、救われるために真理への愛を受け入れない人は、偽りを信じるようになります。終末といえる今の世は、まさにうそ偽りで満ちています。この暗やみの世界の支配者たちは善を悪、悪を善というのです。それゆえに、勇敢に戦い、走るべき道のりを走ろうとする者には忍耐が問われます。でも、主はご自分に属する者が一人も滅びないよう最後まで守って下さるのです。